

## 第1章 総論

### 探究的学習活動を通じた、実社会に生きてはたらく力の育成 —総合学習を幹に、課題を主体的に見出す学習指導—

高橋 利彰

#### 本論の要旨

AI 等の「高度情報社会」や「持続可能な社会」に生きる上で、課題を主体的に見出し、未来を創造しながら他者と一緒に課題を解決していく力が求められている。こうした力を身につけるために、本校では総合学習「BIWAKO TIME」(以下 BT)を軸にして実践を重ね、学んだことを実社会に生かす場面を増やし、地域や社会とのつながりを強化することで、地域を大切にする生徒を育成したいと考えた。

そこで、本年度は、BT の取り組みにおいて、地域が抱える課題の解決に向けた学習に焦点を当て、最終的に社会に参画し未来を創造する生徒の育成を目指すことで、実社会に生きてはたらく力の育成を図ることとした。そのために、BT における「課題の設定→情報収集→整理と分析→発表と交流→まとめ→新たな課題」というプロセスを意識した探究的学習活動を各教科で横断的に取り入れながら、3年間を見通した探究的学習活動を取り入れることで、BT の学びが充実したものとなり、社会とのつながりを重視した学習となるであろう。特に探究のプロセスである「課題の設定」の充実に向けて、「問い」から始まる学習活動を意識し、生徒の視点に立った必要感や達成感のある課題となるように工夫した。また、思考ツールの活用や意見交流、論述等の表現を教科横断型で効果的に設定する。こうした指導により、実社会に生きてはたらく力が、どのように身についていくか、調査や学習成果から評価する。

**キーワード** 実社会、探究的学習活動、課題の設定、教科横断的、思考ツール、総合学習

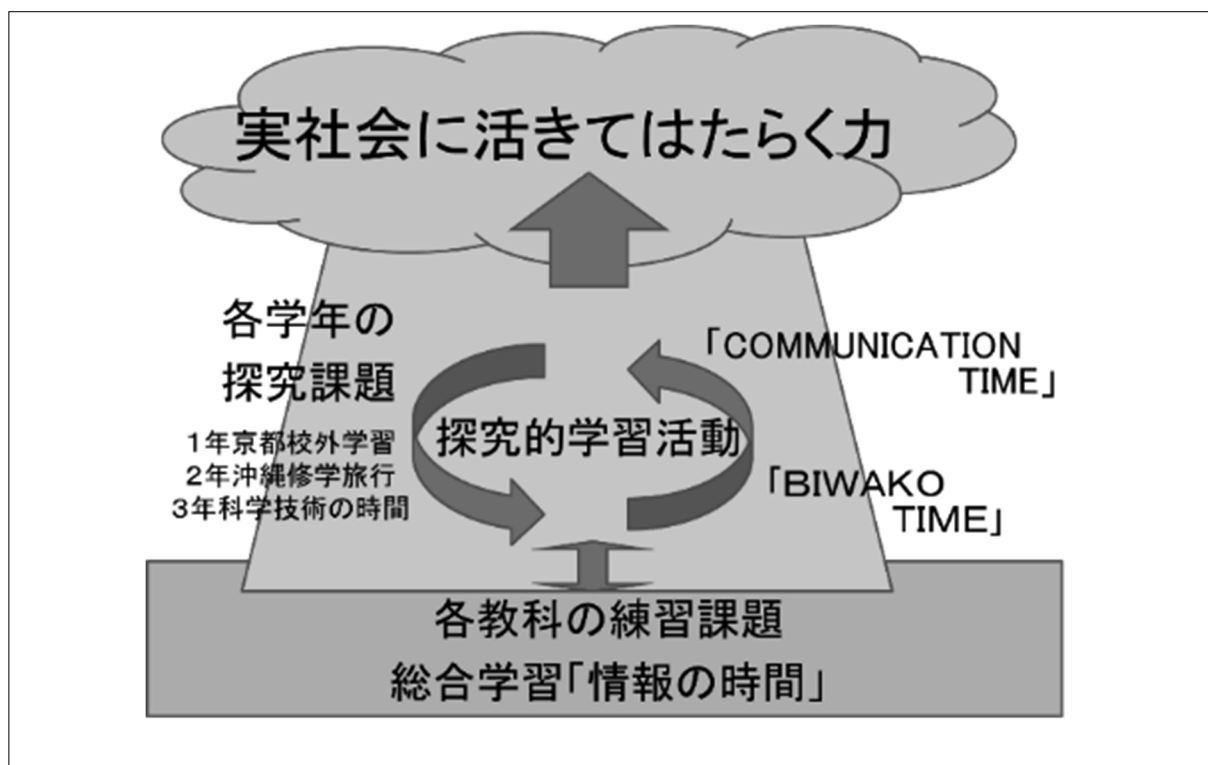


図1 本年度、本校の研究構造図

## 1. 研究の経緯

平成 33 年(2021 年)度から全面実施される新学習指導要領解説(総則編)<sup>1)</sup>では、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む社会に開かれた教育課程の実現を目指している。そのような教育課程の実現に向けて、生きてはたらく知識・技能の習得をし、思考力・判断力・表現力を磨いていくことが必要である。それは、来る高度情報化社会に向けて、知識の量が重要なのではなく、知識や技能を活用して的確に判断して思考しながら、仲間と協同的に課題を解決していくスキルを身につけることにつながる。そして、総合学習のねらいは、自ら課題を見つけ自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく課題を解決する資質や能力を育てることにある。また、見方・考え方を働かせながら学び方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすることである。

本校では、35 年以上にわたって総合学習における取り組みを中心に置き、研究を続けてきた<sup>2)</sup>。変遷を経て現在では、本校の総合学習は、調査研究型の学習である「BT」<sup>3)</sup>、学級劇の取り組みを通して表現を大切にす文化を育てる「CT」、情報活用能力を育てる「情報の時間」から成り立つ。そして、平成 25 年(2013 年)度から 4 年間は、「判断」の「ゆさぶり」や、「思考ツールなどの活用」をキーワードとした論理的思考について研究を進めてきた。

本校の総合学習の課題としては、「情報の時間」での単元内容を BT で効率よく活用していくには、どのようなカリキュラムがよいか、また探究的な学習活動を通して、各教科で学んだ知識や技能を効率よく、かつ効果的に活用できないかということが挙げられた。



図2 本校の総合学習

このような課題に対して、本校ではこれまで、総合学習 BT における探究的学習活動を幹として、各教科で横断的に探究的学習活動を意識して取り組むこ

とで、課題解決に向けた新たな視点や方策を導く指導を効果的に行い、論理的・創造的に思考・判断・表現するスキルの向上をめざしてきた。各教科の学習では、思考ツールや論述、グループ学習、ICT などを活用して論理的思考力を高め、課題を見つめたり、よりよい課題解決に向けて行動しようとしたりするスキルや態度を養ってきた。とりわけ、情報の時間では、各教科での指導の技術が互いに関連付けられるように担当を当てたので、情報の時間での経験が教科の指導に生きてきた。

しかしながら、七里(2018)によると BT での学習の成果として第Ⅲ世代(2015 年から 2017 年)と 1980 年から 2010 年までの第Ⅰ世代と比べると、第Ⅲ世代(2015 年から 2017 年)は、郷土を愛する態度や社会問題に対して情熱を持って取り組んでいる割合は低いことを指摘している<sup>4)</sup>。その理由は、当時の社会の風潮による影響が大きく、滋賀県では富栄養化の問題など環境問題や社会問題が影響していて、家庭での会話の中にもよく出ていることから中学生にとって身近な課題として捉えることができたと思われる。現在では、インターネットの発達で世界的な問題を知ることは容易になるが、その問題を身近な課題として実感することは少ないのではないだろうか。それは、大きな社会問題として存在はするものの、生徒自身が生活に不便さや社会課題として感じることも少ないので、様々な課題を自分事と捉えることが難しいと思われる。また、SNS の発達でパーソナルスペースが存在することから、個人の興味や関心が重視される風潮があるのではないだろうか。これらの傾向から、最近の BT の活動においては、社会問題や環境問題を含むテーマよりも、個人の興味や関心によるテーマの方が重視される傾向にある。

上淵(2004)によると、「興味」があることが、主体的な活動としての学習活動全般において有効であるとは限らない可能性がある<sup>5)</sup>と述べている。確かに、これまでの BT の活動を見ても、調査研究が上手くいくグループもあれば、そうでないグループもあった。上手くいかないところには、興味や関心だけで進めてしまい、調べていくうちに興味を失い、動機付けが弱くなり、活動に主体性がなくなっていると考えられる。BT での活動が形式化し、生徒たちにとって本当の学びになっていないのではないかと感じた。

そこで、主体的な学びを目指すために、調査研究の過程でもっと社会とつながり、調査結果を社会に結んでいくことが有効だと考えた。なぜなら、教員や生徒同士だけではなく実社会に生きる人の意見を合わせて思考することで、多面的・多角的な見方を

育てられるからである。さらに、実社会に生きる思考力・判断力・表現力を発揮する練習できるだろう。その結果、生徒の達成感や充実感を味わい、主体的な学びにつながるのではないだろうか。このことは、BT だけに限らず、各教科においても同様のことがいえるため、各教科でも実社会とのつながりを重視した活動を行うことで主体的な学習活動を実現できると考えた。そして、「郷土を愛し世界へはばたく心豊かな生徒の育成」という学校教育目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む教育課程の実現のために、各教科や情報の時間での学びが基盤となり、探究的学習活動を軸にスパイラルに展開されることが有効であり、それらの取り組みから実社会に生きてはたらく力が育成されることを目指した。

そこで本年度は、探究的学習活動の幹をはじめとする総合学習ととらえることを継続し、その幹を太くするために実社会とのつながりを意識した取り組みを中心に進めることにした。とりわけ、課題を主体的に見出す方策に焦点をあて、課題の設定の場面の充実を図ることで、探究を深め、研究の評価方法を工夫したりすることなどを意識し、研究を進めるようにした。

## 2. 研究の具体的方法

具体的には、以下のような方策を整理し、取り組んだ。

### (1) 本年度の探究的学習活動においた力点

本年度の研究テーマを、以下のように定めた。

「探究的学習活動を通じた、実社会に生きて働く力の育成—総合学習を幹に、課題を主体的に見出す学習指導—」

各教科横断的に、探究的学習活動の練習課題に既習事項と関連づけながら取り組み、学びを深めていく学習活動を研究していくことを中心とする。特に、各教科の研究授業の際には、探究的学習活動のプロセスのどこを強化する学習なのかを指導案に明示する。本校の考える探究的学習活動のプロセス<sup>6)</sup>については、以下のように設定している。

A 生徒が条件の下で課題を設定  
 →B 情報収集  
 →C 整理と分析  
 →D 発表と交流  
 →E まとめ  
 →F 新たな課題

各教科横断的に探究的学習活動の練習課題として、プロセスの一部を使った単元構成を各教科に求

めた。一部とすることで、1つのプロセスに焦点を絞った授業が展開された。中でも「生徒が条件の下で課題を設定」の場面に重点を置くことにし、必要感や有用性の高い課題を提示し、生徒の中から問いが生まれるような工夫を目指すことにした。具体的には、次の3つの視点で課題の設定を考えることにした。

- ①生徒自ら課題を発見できるような導入や発問を設定すること
- ②生徒の視点に立った、必要感や達成感のある単元に係わる問いが生まれること
- ③生徒自ら課題を解決するための手立てを考えられること

この3つの視点を教員間で共通理解をするために、授業の共通理解10か条の中に明記した。このことは、校内研究会や協議会での指導案の中に、「課題を主体的に見出す工夫」として記載した。また、昨年度に引き続き、単元のデザインを単元構想図として表すことにして、単元を通して探究する対象を明らかにした。「単元に関わる問い」とは、単元で学習する知識や技能を活用しながら、学習内容の本質を追究するものであり、単元デザインの核になるものである。

次に、A～Fのプロセスの全てを行う学習の機会が限られる可能性があるため、各学年における探究的学習活動の取り組みを確保することにした。BTが主に前期の取り組みであるのに対し、1年生の京都校外学習、2年生の沖縄修学旅行、3年生の「科学技術の時間」がそれぞれ後期に実施する。そのため、これらを「学年で取り組む探究的学習活動」と位置づけ、A～Fのプロセスを全て取り入れることで、生徒は3年間にわたるBTと併せ、3年間で合計6回の大がかりな探究的学習活動を行うため、探究的学習活動の幹をより太くすることができる(表1)。

表1 本校における探究的学習活動

	前期(全校)	後期(各学年)
1年生	BIWAKO TIME	京都校外学習
2年生	BIWAKO TIME	沖縄修学旅行
3年生	BIWAKO TIME	科学技術の時間

探究的な学習をスパイラル状にカリキュラムすることで、探究のプロセスをより効率的に進めることができ、将来にわたって探究する礎ができると考える。特に、「科学技術の時間」では、滋賀県のエネルギー問題について「新エネルギープロジェクト」と題して、新エネルギープランについて協同的に、根拠を持って創造的に思考・判断・表現をしていく課題とした。未来を担う生徒たちが、エネルギー問題に対して、科学的な知識や理解を根拠に、技術や経

済、環境、生活の面から捉え、よりよい発電システムについて創造的に捉え、将来にわたって考えるきっかけを生み出せるとよいと考えている。

### (2) 実社会に生きてはたらく力の育成

実社会に生きてはたらく力とは、「将来にわたり課題を主体的に見出し、未来を創造しながら他者と一緒に課題を解決していく力」とする。BTのような直接的な経験をすることだけではなく、各教科での一つ一つの学びが将来に社会に出たときに役に立つように意識させることが大切であろう。生徒が持つ興味や関心に対して BT のような調査研究と各教科等での教科の本質に迫る学習活動が関連付けされることで、既習事項の活用場面が生まれ、生徒の思考・判断・表現がより充実したものになる。とりわけ、BT のように各事業所にアポイントメントをとり、実際に話を聞くことで生徒たちにとっては、そこできしか聴けない学びとなることから、校外学習先の事業所とのつながりを強くすることを考えた。また、各教科において外部講師を招き、社会での体験を聴かせることから課題を見出し、課題解決する場面を設定することにした。具体的には、社会科では、「租税教室」と「模擬選挙」の単元で外部講師による講義や体験を行い、得た知識や体験を通して、意見を交流した。また、国語科では、大津祭りについて知識やそれに携わる方々の思いを知ることで、地域の文化の保護と継承について、新たな課題意識を持つことを目的に実施した。地域の祭りに関わる実践や、それにかかる思いを聞き、それについての考えを生徒同士が交流することで生徒が郷土に向き合う機会とする実践を行った。このような実践を通して、多面的・多角的なものの見方を養うことを目標に取り組んだ。

### (3) 情報活用能力の育成

本校では、情報活用能力の育成を「情報の時間」で担ってきた。本年度も昨年度同様に活動状況に合わせて、カリキュラムを組むことを大切にしながら、内容面で精選や変更を行った。3年間の発達段階を見通して、BT に有効な知識や技能を身につけるために、表 2 の内容で実施した。

表 2 本年度の単元内容

学年	単元名
1 年 生	情報の収集
	情報の発信と発表
	データの収集と加工
2 年 生	情報の収集と分析
	情報の発信と発表
	データの比較

3 年 生	論理的思考
	情報の本質について考えよう
	ネットワークと情報共有
	これからの情報社会

### (4) e-ラーニング「College Pathway」の活用

昨年度より、インターネットを利用した英語の e-ラーニングシステム「College Pathway」を導入している。本年度は、英語の授業と朝学習の時間を利用して実施した。英語の授業では、全学年で PC 教室やタブレットを使って、「College Pathway」に取り組ませた。また、長期休暇を利用して自宅で「College Pathway」のディクタンをする課題を出し、学期のはじめに学習の成果を試すディクタンのテストを実施することにした。

また、全校体制で 8:25~8:35 の時間帯を「朝学習」として設定している。その時間を利用して、担任の指導のもと、「College Pathway」に取り組んだ。

### (5) 意見交流の活発化

生徒向けの「有意義に意見交流するための授業心がけ 7 か条」については、カリキュラム・マネジメントの視点を入れて、精選をした。各教室や廊下に掲示し、より生徒の目にふれるようにした。

併せて、教員向けの「授業の共通理解 10 か条」も同様に一部変更し、本年度も研究授業時には指導案に 10 か条のどの項目を意識しているのか、明示するようにした。

### (6) ICT の整備と活用

(4) に記述した英語の e-ラーニングシステム「College Pathway」の導入より、生徒一人ひとりの ID を設定し、英語の授業を軸に PC 教室や教室でタブレットを利用して実践に取り組んだ。また、貸し出し用の PC の OS が Windows 7 のため、新規に PC を 13 台購入した。BT での発表用の原稿作りや発表用のスライド作成、学級劇に使用する音源や映像の加工に活用した。また、Windows 10 のアップデートを行い、整備を行った。

### (7) 道徳教育推進に向けての体制づくり

道徳の充実に向けて、校内の体制を整えた。道徳推進教師を中心に、道徳教育の更なる推進を図った。本年度は、道徳推進教員と 3 人の教員で道徳のチームを作り、校内研究や研究協議会の検討をした。研究推進に向けて、滋賀大学教育学部の三輪貴美枝三輪教授、太田拓紀准教授に指導助言をいただきながら、研究協議会に向けての検討をした。詳細は、本紀要の 11 道徳にて記載する。郷土を愛する態度の育成を目指すことで、BT における調査の意義をより深く感じ、よりよい研究にさせることができるのではないかと研究を進めた。



### (8) 研究の評価

本校に継続して指導いただいている国際日本文化研究センターの山田奨治教授や滋賀大学データサイエンス学部の市川治教授に協議会を通して評価をいただく。また、「実社会を重視した課題解決型プログラムに係る実践研究」の成果として冊子にまとめた。

### (9) 研修体制

先進校としての本校の使命を果たし、探究的学習活動に対する研究の整理や広報を進めるため、7月から11月に行っている校内研究会の研究授業を「公開校内研究会」にした。公開校内研究会の際は、滋賀大学の教員を指導助言者とする。

## 3. 研究の体制

本校では、分掌の一つに研究部を設け、研究主任を中心に5名の教員が配置されている。この研究部が情報や方針を発信して全教員で研究に取り組む。

年間14回の校内研究会を持ち、毎年1回は研究協議会を実施している(研究資料1.2.)。校内研究会では、教員は1年間に1回必ず研究授業を行い、研究協議会では原則、自身の担当教科かまたは道徳の授業を公開する。それぞれの研究授業や公開授業を軸にしなが、日々の授業においても継続的に実践を重ねる。

年間の取り組みで実践したことを総括し、本紀要や研究協議会などで発信する。

## 4. 研究の具体的な成果と課題

### (1) 探究的学習活動の練習課題としての教科の学習

探究的学習活動を中心とした取り組みは、5年目を迎える。各教科の取り組みも試行錯誤から充実期に入った。そこで、本年度も探究させる事象を明確にするために、「単元に関わる問い」を設定することにした。この「単元に関わる問い」を設定することで、探究させる軸ができ、生徒たちの目標が明確になる。このように「単元に関わる問い」を軸にして、「単元に関わる問い」を解決していくための一つ一つのピースを各授業で集めていくと考えた。ここでは、本校教員が研究授業で探究的学習活動に関わって、練習課題として実践した例を示す<sup>6)</sup>。

#### ①主体的な課題となるための工夫について

生徒にとって、課題が自分事であることが重要である。2(1)の3つの視点で課題の設定に取り組んだ。3つの視点をもとに各教科での授業実践を行った。授業実践で行った一つの例を記載する。

#### ②数学 3年「ニケタの計算について分析し、規則性を見出すことから数学的な見方・考え方を育てる。」

単元に関わる問い  
面白い計算方法を作ってみよう

3年生で学習する「数と式」において、展開と因数分解の関係を工夫して利用することで、やや複雑な計算式でも簡単に答えを求めることができる力を養う。特に同じような数字が並ぶような計算式は、日常生活の中で出てくることもある。この実践では、速算術を提示し、その仕組みについて思考することで、数学のよさや面白さを感じてほしいと思い、実践を行った。この実践では、「A条件下での課題の設定」について、計算式という条件のもと、その計算式にどのような特徴があるか考えさせることにした。

学習課題 効率よく計算する方法はありますか。  
どんな問いを持ちますか。

53	38	89	65
$\times 57$	$\times 32$	$\times 81$	$\times 65$
3021	1216	7209	4225

Yチャートを活用して、整理させ、文字式や図を使って式が成り立つ理由について説明をさせた。クイズの要素がある課題ということもあり、その速算術を見ながら、生徒は思考を深めていた。<sup>7)</sup>

#### ③BTにおける課題の設定の工夫

探究的学習活動の軸になるBTでは、生徒が課題を自分との関わりの中で捉えられるようにするための工夫として、例年まず、滋賀県から連想される言葉をイメージマップから思い起こさせ、そこから興味や関心のある事柄について研究テーマを絞らせるようにしている。しかし、それだけでは課題の設定が難しいと感じる生徒もいるため、本年度において力をいれた点は、ゴールデンウィークの休みを利用して課題につながる疑問や調べたいことをレポートにまとめさせた。そして、それらをもとにしなが、各自が研究テーマを決める場面を設定したことである。<sup>7)</sup>

#### (2) 実社会に生きてはたらく力の育成

BTでは、ガイダンスの時に各グループの研究結果が実社会で活用されるような研究を進めていくことを生徒に伝え、研究の目的を確認させた。校外学習のアポイントをとったり、実際に話を聞いたりすることを通して、実社会とのつながりを意識した取り組みとなった。また、校外学習先の事業所に領域別発表会の案内を送り、出席を依頼した。出席された人からは、発表後にアドバイスをいただいた(図3)。



図3 参観のようす

さらに発表会後に「総合学習を語る会」を開催し、教育関係者や訪問先の方が参加され、意見交流を行った。参加者たちからは次のような意見をいただいた。BTの活動が、県庁など周辺の主な施設に認知されていることがわかった。

- ・全校体制での取り組みがよい。
- ・小学校では、研究の出だしに「～したい」「～するにはどうするとよいのか」というアプローチを大切にしている。
- ・地域活性化など、外部に提案することはあるのか。
- ・滋賀県庁としても、「6月は附属中学校の生徒が来る日がある」と、話題にしている。

これまで訪問先の人と交流することはほとんどなかったが、生徒だけでなく、教員もお互いに意見の交流ができて有意義に感じた。

BTでの調査研究を終えて、全校生徒に「調査研究活動を通して、実社会とのつながりのある研究ができましたか」という問いに5段階で回答をさせた。307人の回答を得た。次の表3がその結果である。

表3 アンケートの結果

はい	97人
どちらかといえば、はい	66人
どちらかといえば、いいえ	67人
いいえ	13人
わからない	64人

BTにおいて「はい」や「どちらかといえばはい」という回答は、163人の53%であった。どんな場面で実社会とのつながりを感じましたかと自由記述させると、次のような記載があった。

- ・今びわ湖で起こっている問題について探究心をもって、接することができた。(1年)
- ・今のびわ湖の状態を調べていく中で実際に人々の努力などを感じたから。(1年)
- ・全層循環は琵琶湖の湖底の生物と地球温暖化と関わっていることがわかったので、自分も地球温暖化を進めないための行動ができそうであり、そのことで身近にある琵琶湖を守ることにつながるという面からそう感じた。(1年)
- ・実際に起こっている方言の危機と「近江弁」について調べたことにつながりを感じた。(1年)
- ・彦根観光協会に質問する場面で滋賀の観光についてつながりを感じた。(2年)
- ・滋賀県でも起こる可能性のある地震で使える防災グッズを考案したのは、この社会でとても役に立つと思ったから。(2年)
- ・朝ドラについてもっと関心を持つようになりました。(2年)

- ・大型ショッピングセンターに行き、街頭インタビューをして様々な世代の意見を知ったとき(2年)
- ・寿命という視点で、日常生活にも活かせることを学べた。(3年)
- ・実際に自分のテーマと同じ内容をもとに働いている人に話をうかがうことで実社会にいかされる探究学習の力を感じることができた。(3年)
- ・滋賀県のスイーツをPRして、地域を活性化させようというテーマで研究したので実社会とのつながりがあると思う。(3年)
- ・県庁の方に話を伺い、実際に研究されたことについて学べた。私たちの研究でまとめたことを利用してもらえた。(3年)

自由記述を見ていると、調査研究したことが社会に貢献したと感じている生徒もいる。ただ、グループの中には、訪問先を図書館とし、書籍から調査研究をするグループもある。そのようなグループの研究内容は基礎研究の要素が強く、実社会に生きるとはすぐにはいいきれないので、アンケートの結果も半数に止まることも理解ができる。それを加味しても、本校調査研究の結果が、社会的に興味深いものとなり、社会に一石を投じることができれば、実社会とのつながりを持つことができるのではないだろうか。時間や場所、中学生という発達段階などの制約のため、64グループのすべてが社会に一石を投じる研究ができるとは限らない。そこでよりよい研究をしたグループから学び方を学ぶことも重要である。そういう意味では、BTの最後に行うまとめの集会で、BTを振り返る時間をとても重要であり、来年度に向けて、調査した内容が実社会との交流を通してさらに思考を深め、実社会とのつながりをもった調査研究にもう一步進められるとよい。

STでは、各教科で実社会のつながりを意識した取り組みを行った。特に国語や社会では、外部講師を招聘し、課題について思考・判断・表現する場面を設定した。社会科の取り組みとして2つの単元で外部講師による講義を行った。まずは、「租税教室」において滋賀県税理士会より税理士を招き、税についての知識やそれに係わる課題について理解と関心を深めた。次に「模擬投票」において大津市選挙管理委員会事務局の方を招き、選挙の投票を体験した(図4)。体験を通して有権者としての責務について理解を深めた。さらに、グループディスカッションを通して自他の意見を交流させることで自分の意見を深めさせた。また、税に係わる身近な課題を取り上げ、3つの立場で考えさせることで多面的なものの見方を養うことができた。

また、国語科の取り組みとして、外部講師による

講義のために大津市立歴史博物館より副館長を招き、大津祭についての知識やそれに携わる方々の思いを知り、郷土を愛する心を養うことを目的に実施した。地域の祭りに関わる実践やその裏にある思いを聞き取り、また、生徒自身が質問から疑問や意見を交流させることで、生徒自身の地域の行事に対する考え方に迫り、郷土を愛する心を養う実践を行った。<sup>7)</sup>

### (3) College Pathway の取り組み

英語の授業での活動の中に、年間を通しての全学級において授業の中でパソコン室を利用して、「College Pathway」に取り組みさせた(図5)。まずは興味のあるコンテンツから学習させるようにし、夏休みに自宅で「College Pathway」のディクタンをする課題を出し、自宅学習をするようにした。また、2期のはじめに学習



図5 College Pathway 取り組みの様子

の成果を試すディクタンのテストを実施した。冬休みにもレベルを変えた同じ課題を出した。

コンテンツが多様であるため、生徒は興味を持って取り組んでいる様子であった。特に「聞く」に関しては、「College Pathway」は適切な教材であった。また、自宅での学習もでき、意欲のある生徒は自宅で自分なりに進めているようである。「学習マイレージ」では自分の学習が可視化できるため、競争心が駆り立てられ、さらに学習を進めようとする生徒もいた。

また、「朝学習」でも実施をすることで、全校体制で行うことができた。英語科だけではなく、学級担任の関わりもでき、生徒にとっての使用価値が高くなり、更なる活用が期待できた。

課題としては、すべての生徒が自宅学習をしているわけではなく、中には学校以外では「College Pathway」を進めていない生徒もいる。それは、それぞれの家庭環境において継続して取り組むことができないケースがあるからである。今後は「College Pathway」の有効的な活用法などを生徒に示すことで、「College Pathway」を使う目的や動機を明確にし、主体的に学習に向かう生徒を増やすことができると考える。

### (4) 意見交流の活発化

生徒向けの「有意義に意見交流するための授業心がけ7か条」を掲示し、意見交流に生きるように意識させた。こちらは「研究だより」で生徒に周知した後、

各教室や廊下に掲示し、生徒が時々見て思い出せるようにした。

#### 有意義に意見交流するための授業心がけ 7か条(生徒向け・教室掲示)

- ①授業の目標やねらいをしっかりと理解しましょう。
- ②BT や「情報の時間」で学んだ「学び方」を活用しましょう。
- ③身の回りの事柄から知りたいことや課題を見つけ、問いを作りましょう。
- ④問いに対して、自分の意見を、思考ツールなどを使ってまとめましょう。
- ⑤「交流タイム」では、クラスの人と気軽に意見交流して、他の意見を知りましょう。
- ⑥発表では、まず結論を、次に根拠や事実、理由を述べましょう。
- ⑦他の人の発表を聞くときは、共通点と相違点を整理しながらメモしましょう。

### (5) タブレットの整備と活用

生徒用タブレットを40台、教員用タブレットを1台の活用として、BT の調査研究をまとめたものをPDFとしてタブレットに保存し、スライド形式で発表に利用した。拡大提示やページを送りながらスムーズな発表ができるようになった。また、「College Pathway」を教室で行う場合は、タブレットを活用して学習を進めた(図6)。



図6 タブレットを活用している様子

今後は、タブレットを用いて生徒の考えを集約したり、お互いの考えを交流したりするような活用を進めていきたい。

### (6) 研究の評価

表4によると、本年度も本校3年生の全国学力・学習状況調査において、国語、数学ともに全国平均を上回り、全国平均との差は、A問題よりもB問題の方が上回っている。このことから、探究的学習活動を続けることで、思考力・判断力・表現力が身につけていると言える。

表4 本年度の本校学力学習状況調査の結果

	国語 A	数学	英語
本校	89	80	74
滋賀県	70	57	55
全国	73.2	60.3	56.3

(平均正答率 都道府県別正答率は整数で公開)



(7) 研修から

本年度公開した校内研などの参加者実績は表5の通りである。滋賀県内のほか、県外からも多数の参加者があった。校内研公開でも延べ20名の参加者があり、有意義な研修の機会を提供できたといえる。

表5 本年度本校の公開研究会の参加者

日程	名称(公開教科)	参加者数
7月1日(水)	校内研6(美理)	3名
8月28日(水)	校内研7(英音)	10名
9月1日(土)	研究協議会(全)	126名
11月8日(水)	総合学習を語る会	7名

また、本年度もいくつかの学校から個別の訪問や、研修会における講師招聘などの機会を得た。本校における思考ツールや総合学習の研究が、多くの教員においても注目されている様子がうかがえる(表6)。

表6 本年度の他校との研究交流

<b>学校訪問</b>
4月5日(月)京都橘中・高等学校(総合学習)
6月19日(水)京都橘中・高等学校(総合学習)
<b>講師招聘</b>
8月23日(水)東近江市教育委員会(思考ツール)

5. 今後の展望

各教科での学習の中で、生徒から聞かれる声の中に、「この学習は将来何の役に立つの?」「将来、絶対使わない」などがある。そういう生徒の心の中は、中学校での学びが将来につながらないと思っているのであろう。一方、教員は、各教科では学ぶよさや楽しさを味わえるように教科研究に一生懸命に取り組み、各教科での学びを通して知識や技能を身につけ、生徒の思考力・判断力・表現力を高めていかなければならない。本年度の研究は、実社会に生きる力の育成を目標に取り組んだ。生徒たちには、各教科や総合学習を通して、課題を主体的に見出し、未来を創造しながら他者と一緒に課題を解決していく力を身につけてほしいと考える。学校で学んだことを実社会で生かしたり、実社会から学んだことを普段の授業に生かす実感が生徒は学ぶ意義を感じることができるであろう。また、本校を卒業した生徒の声の中に、BTで学んだことによってグループ活動での話し合い活動がスムーズに展開でき、中学校での経験が生きたと聞いた。また、大学での研究において問いの立て方や調査の分析が役に立ったと聞いた。BTやSTの取り組みの中で実社会に生きる人の思いにふれ、その生き方に共感することができる。その共感こそが、生徒の生き方に影響を及ぼすので

ある。また、課題に対して自分の考えをまとめ、考察していく過程を通して、既習の知識や技能を駆使しながら、実社会に生きる見方や考え方を持つのではないだろうか。本物に触れる経験こそが、机上の空論でない考えを育て、社会に出たときに生きてはたらく力となって発揮されることであろう。

課題としては、BTにおいて、テーマを「琵琶湖」としているので内容が絞られることで、毎年同じようなテーマが見られる。それ故に、研究の限界を感じている教員もいる。社会問題や環境問題に関わる研究を発達段階に応じて深めながら、生徒の研究成果を社会に活かせる場面を増やしたい。そのためには、ローカルな問題だけではなく、グローバルな課題への視点が研究を広げていく道筋だと考える。ローカルな課題とグローバルな課題とを関連付けていくことで、学校教育目標にある「郷土を愛し世界へはばたく」ことへの実現に向かうことができるであろう。た、各教科においては、教科の本質に迫りながら、教科の目指す資質・能力を育成することが目的である。実社会との接点を持ちつつ、教科の本質に迫ることを充実させることが重要であろう。

注.

- 1) 本稿で「新学習指導要領」とは、以下を指す。文部科学省「中学校学習指導要領」, 2017
- 2) 巻末資料を参照
- 3) 以下にもBTの取り組みを紹介している。田村学編著「平成29年改訂 中学校教育課程実践講座 総合的な学習の時間」, ぎょうせい, 2017
- 4) 七里広志, 「調査研究型の総合学習が卒業後に与える成果に関する, 卒業生への世代追跡調査」, 滋賀大学教育学部附属中学校, 2017,
- 5) 上淵寿, 「動機づけに関する研究 評価と測定に関する視点から - 特に興味について」, 第10回動機づけに関する研究, 2004
- 6) 本校では、元々BTの学習場面を示す5つの言葉を、以下の資料から引用して活用している。国立教育政策研究所教育課程研究センター「平成28年度教育課程研究指定校事業公募課題 総合的な学習の時間」。なお、元の資料では、「課題の設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現」となっている。
- 7) 数学, BT, 国語の各取り組みについては、後述の各授業者による稿に詳しい。



■研究資料 1. 令和元年(2019年)度校内研究会

年間計画

回	月日	曜	内 容	研究授業 1	研究授業 2
1	4月8日	月	研究の方向性確認と各部から提案	—	—
2	4月17日	水	研究の方向性 1	高橋 3B	永田 2C
3	4月24日	水	(卒業生実習)・研究の方向性2	島田 3A	山下 1C
4	5月8日	水	(卒業生実習)・個人研究交流	宇田 1B	若宮 2C
5	5月29日	月	研究の詳細の確認	井上 1A	橋本 3B
6	6月26日	水	協議会細案確認・発送作業	太田 3A	藤田 3C
7	7月1日	月	基調提案確認・研究授業内容交流	公 西田 3C	公 原田 2B
集中	8月1日	木	提案内容協議・研究授業指導案確認	—	—
8	8月28日	水	協議会直前の確認	公 牧野 2A	公 森 1B
協議	8月31日	土	授業研究・全体協議・講演	研究資料 2	研究資料 2
9	11月6日	水	総合学習を語る会	公 BT	公 BT
10	11月25日	月	協議会の反省・総括・まとめ、紀要執筆	—	—
11	1月20日	月	人権研修	—	—
12	2月3日	月	研究紀要執筆確認	—	—
13	2月17日	月	研究総括 1・来年度に向けて	—	—
14	3月2日	月	研究総括 2・新年度の研究に向けての議論	—	—

■研究資料 2. 令和元年(2019年)度研究協議会

大会テーマ 「探究的学習活動を通じた、実社会に生きてはたらく力の育成

ー総合学習を幹に、課題を主体的に見出す学習指導ー

9:00～ 9:10 開会行事

9:10～ 9:30 基調提案 高橋利彰(研究主任)

9:45～10:35 公開授業 1

10:50～11:40 公開授業 2

12:50～13:50 教科別分科会

教科	単元名	協議題(主題のみ)	指導助言・共同研究	本校教員 (授業者)
国語 1年	説明的文章を探究的に読む	説明的文章を探究的に読むと主体的な学びは実現できるか	福永かおる(県教委) 北村拓也(センター) 長岡 由記(滋賀大)	井上 哲志 永田 郁子
社会 3年	日本国憲法と基本的人権 ー社会の変化と人権保障ー	社会科における探究的学習と実社会とのつながりを考えた授業づくり ーグループ交流などの方法をヒントにー	上田 真也(県教委) 岸本 実(滋賀大)	橋本 正輝 七里 広志
数学 3年	箱ひげ図	データ活用における数学的見方・考え方を高める授業づくり	小谷 雅彦(県教委) 高澤 茂樹(滋賀大) 神 直人(滋賀大) 渡邊 慶子(滋賀大)	高橋 利彰 山下 亮
理科 2年	生命を維持するはたらき	生命領域における探究的学習活動の効果的な展開について	一伊達 統(県教委) 多田尚平(センター) 糸乗 前(滋賀大)	原田 雅史 太田 聡
英語 1年	lesson 4 Field Trip	学びをつなげる小中連携のあり方	一色 豊和(県教委) 田中 佑美(滋賀大)	宇田 竜子 牧野 尚史 加藤美奈子
音楽 1年	創作 ー言葉を使って気持ちを表現しようー	探究的活動を取り入れた学習における音楽の仕組みの追求 ー豊かな表現力・表現技能を育むー	杜若 恵代(県教委) 杉江 淑子(滋賀大) 林 睦(滋賀大)	森 美幸
美術 3年	生活の中のデザイン	創造的な見方・考え方を深めるための探究的学習活動	田中 美穂(県教委) 新関 伸也(滋賀大) 村田 透(滋賀大)	西田 諭史
保体 2年	体づくり運動 巧緻性を高める運動	自ら課題を見つけ、運動における深い学びが実生活につながる学習指導	中原いずみ(県教委) 平井 肇(滋賀大)	若宮 隆洋 藤田 範子
技術 2年	生物育成に関する技術～蚕の飼育を通して～	生物育成に関する技術における探究的な学習指導	喜田 憲恵(県教委) 森 太郎(滋賀大)	島田 拓哉
道徳 1年	「ぼくのふるさと」 郷土を愛する態度について	公開授業のみ		山下 亮
道徳 2年	「祭りの夜」 郷土を愛する態度について	公開授業のみ		永田 郁子

14:05～15:35 全体協議「データサイエンスと探究的活動」

司会 石田 博士(本校副校長)

山田 奨治(国際日本文化研究センター), 市川 治(滋賀大学), 高橋 利彰(本校研究主任)

15:35～16:15 講演 市川 治 先生「統計に騙されない子供たちを育てるために～常識や感性のとらえ方～」

16:15～16:20 閉会行事